

# ～スマホ片手に植物ハンティング～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 市民参加による植物分布調査を中心とした博物館機能の向上  
研究代表者 : 総合政策学部 教授 平塚 明  
課題提案者 : 釜石市郷土資料館 館長 菊池清太  
研究メンバー : 阿部 里紗 (NPO法人 Asia Environmental Alliance)  
技術キーワード : 携帯端末、位置情報、マッピング、市民参加

## ▼研究の概要(背景・目標)

地域博物館の活性化を図るため、スマートフォンを用いた市民参加型植物分布調査を実施した。従来の類似手法のほとんどが失敗していることを踏まえ、システムは極力シンプルにした。ゲームの要素も取り入れて参加者のモチベーションや連帯感を高める仕組みに配慮した。この試みで維持された継続的な博物館の利用が、自発的な市民グループの誕生を促すことが、最終目標である。

## ▼研究の内容(方法・経過)

手法の異なる2種類のワークショップを実施した。

1. 植物ハンター。本研究のために、シンプルな画像情報システムを開発した(The Mapper、開発者: ソフトウェア情報学部 吉田尚平)。子どもたちが中心の参加者は市内を歩きながら、各人が与えられた課題(たとえば「赤い花や実を持つ植物」)にしたがって植物を探し、携帯端末(スマートフォンやタブレット)のカメラで撮影した後、The Mapperのサイトに送信した。撮影画像にはGPS情報がタグづけられており、直ちにマップ画面上に配置された。マップは移動中の参加者も随時、携帯端末で見ることができた。館に待機したスタッフは、アップされた画像から種(しゅ)の同定を迅速におこなった。撮影した植物の種名がすぐに判明するという仕組みが、参加者の満足度を高めた。

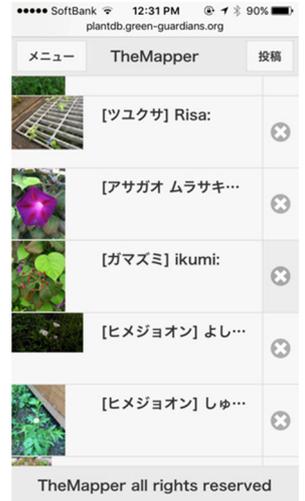
2. 地元の植物専門家(鈴木弘文氏)による解説付き野外植物観察および標本作りワークショップ。このワークショップから、新たに市民グループが発足した。

## ▼研究の成果(結論・考察)

自分が撮影した植物画像が直ちにマップに現れる(可視化)、課題に沿ったものが蓄積される(ポイント制)、自分ではわからない植物名が素早くわかる(報償)というゲーム的要素があったため、参加者は熱心に取り組んだ。そのため、イベント実施日以降も撮影画像の投稿が相次いだ。釜石市以外からの参加者がその居住地に戻って画像を送信してきた例もあった。スタッフは同定や対応に追われたが、この仕組みが参加者を強く惹きつけていることがわかった。市民参加型生物調査(スマートフォンによる植物マップ作りのシステム)が、極めて有効であることが確かめられた。



植物ハンターが撮影した画像は、携帯端末の画面のマップに現れ、確認することができる。



控えていたスタッフが画像から同定した植物名が、即座に画面に現れる。画像の横には植物名とハンターのニックネーム。



ワークショップをきっかけに復活した釜石植物の会。2015年10月18日の再開第一回では、大槌町須賀町の湿地で植物観察をおこなった。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

情報システムだけではなく、随時、種を同定し、参加者の質問にスタッフが答えるという「人手をかけたサービス」が重要だった。ただし、この企画の参加者は若年層に偏っていた。一方、植物観察会や標本作りに参加したのは高齢者だけだった。植物観察会の参加者からは、もっと多くの植物を見て回り、釜石の植物について知りたいという声が聞かれた。その結果、鈴木弘文氏がかつて会長として主宰し、長く休眠状態にあった「釜石植物の会」が再び活動を始めることになった。これが本研究の最大の成果である。今後は植物ハンターによって集積した植物分布情報を、館の展示内容に加えたい。また、「釜石植物の会」の継続のために別の研究助成に応募したところ、採択された。



あなたも試してみませんか? 左のQRコードを読み取って、The Mapperにアクセス→「名前を入力してください」→名前を入力する(筆名でも可)→「完了」→「設定」→「情報を投稿する」→「ファイルを選択」→「写真を撮る」→実際に撮ってみる→「現在位置から選択」→「OK」→「送信する」。「投稿が完了しました」と表示されたら、→「地図を確認する」→あなたの撮影した画像がマップ上に配置されているはず。

(なお、今回、種名同定サービスはありません。^\_^)